図書館報
光丘
No.160

山居倉庫の建設

公益財団法人本間美術館
事務長　清野　誠

山居倉庫が建設されて百三十年になろうとしている。欅並木と切妻の大規模倉庫が十二棟連なり、美しい景観をみせているが、その歩みは近現代米穀流通の歴史を物語る貴重な遺例として、令和三年に国指定史跡となった。

山居倉庫の歴史は明治二六(一八九三)年、株式会社酒田米穀取引所の付属倉庫として建設されたことに始まる。事業の拡大に伴い北庄内を中心に倉庫網を展開していったが、山居倉庫はその中核となった施設である。

幕藩体制の崩壊後、明治政府は安定的な税収確保のため、それまでの年貢米から地租に変更し金納化した。その結果、年貢米は売買自由な商品として商人によって買い集められ、俵装が不十分なものや、乾燥不良の粗悪米までも市場に出回るようになった。また、西南戦争を契機とするインフレが米価の高騰を招き、質を問わない米の流通が品質低下に拍車をかけた。明治一四(一八八一)年の松方デフレ政策もまた、米価の低落、米質の低下を招き、こうした粗悪米の流通は、藩政期に培ってきた各地銘柄米の信用を低下させて全国的な問題となった。庄内米の声価も例外ではなく、鳥もまたいで通り過ぎると揶揄されるまでになっていた。

こうした状況に危機感を抱いた商人・地主層は、旧藩以来の円滑な米取引による産米改良を模索した。明治七(一八七四)年に酒田米会社を設立して米券を発行、明治一〇(一八七七)年には新井田倉庫を借り受け、廻漕会社を設立して米券を発行したが、米商会所条例に抵触したこともあって営業を停止している。明治一二(一八七九)年には東田川郡の豪農渡辺作左衛門が新井田倉庫の払い下げを受け倉庫業を経営したが、松方デフレ政策の影響もあって明治一五(一八八二)年には倒産廃業している。本間家は明治一九(一八八六)年、新井田倉庫を取得して本格的に倉庫業を開始した。「庄内改良米及ヒ庄内精選米預リ定則」を定め、新井田倉庫での米穀預かりの標準とし、また、預り米を一等、二等の二種に区分、一俵を四斗入に統一している。この保管方法は、山居倉庫での米預託制度に基本的に踏襲されることになる。

明治一七(一八八四)年、酒田の富商十二人が出願した酒田米商会所の設立が認可された。しかし、不景気のため出資者が集まらず、開業には至らなかった。結局、旧藩主酒井家が中心となり再度出願、明治一九年に株式会社酒田米商会所が認可開業し、本間蔵(新井田倉庫)と町蔵を保管倉庫とし、米取引と入庫米の品質管理を行うようになった。経営陣を旧藩主と旧家臣で固め、旧来の商人が仲買人になるという藩政期同様の経営形態を採り、また、士族授産という一面も持ち合わせていた。一方、酒田米商会所が酒田商人自身の力で開業に至らなかったことは、維新後の混乱と資本主義経済への転換期にあって、酒田商人の資本蓄積が十分ではなかったことを意味している。そして明治二六年、取引所法が制定され、先物取引と受渡し米の倉庫業が認められると、酒田米商会所は株式会社酒田米穀取引所に改組し、付属倉庫として山居倉庫を建設した。酒田米穀取引所の経営は酒田米商会所の経営を踏襲したもので、むしろ旧来の商人層や新興の地主層と強固に結びつき、米穀検査による産米改良によって庄内米銘柄の再興を目指したものであった。山居倉庫が生産者の手にわたるのは、昭和一四(一九三九)年の米穀配給統制法の制定まで待たなければならなかった。

地域史料の保存について⑤

白崎五右衛門家に関わる史料について

―酒田町年寄役の役職を中心に―

庄内酒田古文書館 館長　杉原丈夫

白崎五右衛門家は越前（石川県）より来ていると言われますが、代々秋田町に越前屋という呉服商を営んでいました。一恭の代寛政八年（一七九六）に金五百両を藩に献上し、五人扶持を給し御用達格になり、帯刀が許されました。

酒田はしばしば大火に見舞われ、大きな被害を被っていた人々を救おうと一二〇ケ所の貯水池を設定させ、後に五〇ケ所を追加しました。また茅屋根を瓦屋根に替えるために、製瓦の技術を越前から採り入れ、文化六年（一八〇九）遊佐郷野沢に瓦工場を建設しました。さらに警鐘を十ケ所に設けました。

糞便桶を配置して肥料として売却し、その代金を消防費にあて、消防設備を整え、理髪店を消防組織の連絡場所にし、公益世務に尽力しています。

六代目白崎一実は、一恭の後を継ぎ、惣火防世話掛を命ぜられたのは二十三才の時です。

文政七年（一八二四）製瓦工場を松山に設立し、松山城城門を改修したので、加増して七人扶持となり、鷹匠格になりました。

天保二年（一八三一）に、当時天災飢饉や流行病に苦しむ人々のために、酒田町奉行加藤伊右衛門は、一実を御町医修業引立掛りに任命しました。

天保四年（一八三三）医師佐藤蒿庵と計画して、医会所を本町六ノ丁の蒿庵宅に願い出ました。これが医会所十全堂の創立です。

現在の酒田地区医師会の起源となっております。

消防の祖・白崎良弥・善吉を讃える石碑（日和山公園）

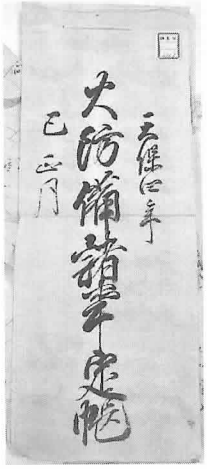
天保十一年（一八四〇）三方領知替えの幕命が下り、庄内藩主が長岡藩主に、長岡藩主が川越藩主に、川越藩主が庄内藩主に転封の命が下りました。

庄内農民は隊を作り江戸出訴を企てました。これを天保一揆と言います。

この時江戸にいて、佐藤藤佐と計り、白崎一実は川越藩邸に伺い今度庄内に来る川越藩の内情を探りに行きました。ところがそれを知った農民は大挙して、越前屋白崎家に押し寄せました。

それから誤解が解けるまでは四年後になり、庄内藩より賞与があり二四石取りに昇進しました。

白崎五右衛門宅店に押し寄せる農民
「夢の浮橋」光丘文庫蔵



天保四年
火防備諸事定帳
巳正月
（伊東家文書）

白崎五右衛門
組附
岡丁持
先立
火印持
火防莚働
一弐拾壱人
内　弐人
　　壱人
九人

以上、酒田町年寄を務めた白崎五右衛門家の歴史を振り返ると、いつ頃から三十六人役を務めたのかを示す史料が見つかりませんが、三十六人御用帳に登場してくるのは文政七年（一八二六）三月の覚書に町年寄格白崎五右衛門として現れるのが最初になります。

その後、酒田の消防や十全堂など医会所の設立、天保の三方領知替えの折りなどで功績を上げ明治に至ります。

「伊東家文書」「野附家文書」などを紐解き、今後史料保存と同時に十分その活用が図られていかなければならないと考えます。（酒田市史史料編一，二巻に詳しい。）

御用金内借の覚

覚
一、金五両也
右之通、内借仕候処
実正ニ御座候以上
巳十二月十九日
渡辺隼人印
白崎五右衛門殿

酒田町組大庄屋渡辺隼人から町年寄格白崎五右衛門宛ての町用銭の内から５両を引出し一端借用したという覚書

戦前の酒田における映画館（終）

酒田市立図書館長　岩浪勝彦

○トーキー（発声映画）について

映画は現在、音声がついていることが当然となっているが、日本では昭和十年頃までは無声映画が一般的であり、弁士という説明者がストーリーやセリフを映画館内で話すことにより、観客は外国映画でも理解できた。昭和二年にアメリカで音声のついた映画が発明され、これをトーキー（talkie）と呼んでいた。

トーキー映画は音声を発するための装置を映画館に備え付ける必要もあったほか、撮影する側も多くの苦労があり、松竹蒲田撮影所は町工場が近くに多かったこともあって、録音に適さず、昭和十一年に鎌倉市大船に撮影所を移転している。酒田でトーキー作品が上映された最も古い記録は、昭和二年十二月五日に港座にて歌舞伎の松本幸四郎主演による「素襖落」という作品が日本初の発声映画という触れ込みで公開されており、その広告には「画面に現れる動作と本人の音声が其のまま聴かれます」とある。これは皆川芳造によるミナトーキーという発声装置を用いた短編である。この作品は、東京では同年十月に公開されていることから、東京での公開から二か月後に酒田で上映されたことがわかる。

驚異すべき世界の一大發明
科學界の一大驚異・人類文化への大貢獻
文明開化の世の中になぜに寫眞が物言わぬ
愈々「もの言ふ寫眞」の大公開!!
日本で始めて出來た
トーキー大公開
帝劇幹部　格式高き四幕
一門初出演
松本幸四郎　壽海　市川寿美蔵
佐々木孝丸
素襖落
松本幸四郎毎回素顔の御挨拶
高田雅夫舞踊團・幻想の印度觀・影其他數稔上映
酒井浮之助・其一門大力演・血湧き肉躍る御教中の大活劇
平和舘　五日　酒田　港座
鶴岡劇場
特別割引券は本社及び支局を始め公開地の書籍店樂器店其他有名商店にて發賣致し升

発声映画「素襖落」の広告（昭和２年11月30日付け両羽朝日新聞）

昭和五年七月に藤原義江主演の「ふるさと」が中央座で公開されていることが新聞記事で判明しているものの、同じ記事にはこれより先にマキノ式トーキー作品が酒田で上映された旨の記述があり、これはマキノプロが昭和四年七月に公開したディスク式トーキー作品「戻橋」を指していると思われるが、音声が映像にシンクロせず、トーキーの普及に疑念を抱かせるほど観衆や映写技師に不評をかった作品である。なお、初期トーキー作品として有名なところでは、東京での公開から八カ月後の昭和六年十月七日に中央座で初のスーパーインポーズ日本語字幕つきのマレーネ・ディートリッヒ主演「モロッコ」が公開されているほか、昭和七年七月には日本で最初の本格トーキー作品といわれる松竹の「マダムと女房」が酒田館で公開されている。

○光丘文庫所蔵資料の価値

これまで五回にわたって現存する地元新聞の小さな記事や広告から戦前期における酒田の映画館事情を紹介してきたが、こういった情報はこれまで郷土史関連の出版物で取り上げられたことがなく、一般の方が目にする機会もなかった情報である。

焼失する三年前からグリーンハウスで映画を見てきたということもあって、酒田の二十世紀初頭の映画館事情について知りたいと思っても、世界のあらゆる映画に関する詳細な情報をウェブ上で容易に入手することができるようになった一方で、地元の近代史については詳しく調査されることもなく、昭和の頃と同様に不明のままとなっている事柄がまだまだ多い。

光丘文庫は、こういった日の当たらないままとなっている酒田の歴史情報の宝庫であるにもかかわらず、誰も目にしたことがない情報が大量に眠っていることはほとんど知られていない。それは、所蔵資料の周知のほか、歴史情報を求める利用者が当該情報にアクセスすることを可能とする仕組み（たとえば、検索可能な所蔵資料のテキスト化など）の整備が進んでいないことが最大の原因であり、今後の光丘文庫の発展は、その整備にすべてかかっているといっても過言ではない。

一般に文化史的に貴重か否かを判断する場合、希少性や第三者による評価、金銭的価値などを物差しに判断しがちであるが、光丘文庫所蔵資料の真の価値とは、家族のアルバムが金銭的価値がなくても家族にとっては大切なものであるのと同じように、酒田の歩みを伝えるという意味において市民にとってかけがえのないものであり、金銭的価値や文化史的価値などの他者の判断基準に基づく価値とはまた別の価値があるものと考えている。そういう意味において、おそらく世界に一部しか現存していない明治以降の地元新聞や雑誌は、発行当時の酒田の状況や価値観などを現代に伝えてくれるタイムマシンであり、その価値は金銭的に量ることはできない類のものである。

日和山「文学の散歩道」の案内（続）

日本現代詩人会会員　相蘇　清太郎

日和山公園に整備されている「文学の散歩道」の芭蕉句碑にちなむ酒田の俳人について、前号との重複もあろうが、やや詳しく見てみたい。芭蕉は、随行の曽良と共に酒田に九泊した。「おくのほそ道」（一五〇日に及ぶ）の中で酒田逗留の長さは、尾花沢十泊、金沢八泊などと共に際立つ。芭蕉は歓待を受けた。

芭蕉を歓待した酒田の俳人たち

㈠医師・伊東玄順（俳号不玉）

芭蕉を歓待した酒田の代表的な俳人は、医師・伊東玄順、不玉である。芭蕉と曽良は、出羽三山・鶴岡から酒田に到着し象潟まで足を伸ばし、また酒田に帰って大山・温海・鼠ヶ関を経て越後路へ抜けたが、旅程の中で、不玉亭のように一所に九泊もしたのは、ほかに例がない。芭蕉にも知られた俳人だった。

『日本古典文学大辞典』（岩波書店）によると、町医を営むかたわら、俳諧に遊ぶ。元禄十年（一六八七）没。享年五十歳。元禄二年六月、「おくのほそ道」の旅の途次の芭蕉を自亭に迎えて入門を果たし、同五年には自撰の『継尾集（つぎおしゅう）』を刊行した。また、東北行脚の子考（蕉門十哲の一人）を後援した。同六年春には、江戸の芭蕉のもとへ自作の歌仙一巻を送って評点を乞い（「秋の夜」評語）、同七年春には、京都の去来（芭蕉高弟）に書を寄せ「かるみ」に関する示教を受ける（「不玉宛論書」）など、遠境にありながら、たえず蕉風の新しい動向に追随すべく努力を重ね、酒田俳壇の基礎を築いた（「項目執筆者　尾形仂」）。

㈡浦役人・寺島彦助（俳号安種・詮道）

芭蕉一行が酒田に到着して最初の句会は、寺島彦助宅（安種亭）で開いた。寺島氏は俳号安種（又は詮道など）、大問屋の商人で、幕府から浦役人として任じられていた。浦役人の役目は、御城米海船積立諸事御用、御米置き場の守護、御城米積み川船・海船が入港出港する際の関係役所への届出方などであった。芭蕉を招いた句会では七吟（七人による）歌仙を巻いたが、芭蕉の発句「涼しや海に入りたる最上川」に、脇句「月をゆりなす波のうき見る」を付けている。芭蕉来遊以前には漢和連句（漢文の句と和文の句を織り交ぜた連句）の座を主宰するなど俳諧連句を興行している。佐藤七郎「寺島彦助」（『方寸』第十号、酒田古文書同好会）参照。

㈢近江屋三郎兵衛（俳号玉志）

玉志は、近江屋三郎兵衛、豪商で近江がルーツと見られている。俳号玉志からもわかるが、不玉伊東玄順の門人である。芭蕉、曽良、不玉、玉志で、納涼の句会を開き、芭蕉たちをもてなした。その時の芭蕉自筆の懐紙が遺されている（本間美術館蔵）。真桑瓜を前にして、句ができない者は食べることできずと戯れて、即興で詠みあった。不玉の句は「興にめでてこころもとなし瓜の味」であった。

俳諧師芭蕉から俳人芭蕉へ

芭蕉は俳諧連歌（連句）の師匠であった。連句は、複数の作者が五七五の長句と七七の短句を付けて連ね合作して一巻の詩篇を完成する座の文芸である。酒田で巻いた歌仙は、三十六句形式の連句である。

芭蕉は、「おくのほそ道」の旅で各地の俳人たちと歌仙を巻いたが、芭蕉の発句は、歓待してくれる亭主への挨拶であり、その土地への挨拶であることは前号で述べた。芭蕉は、紀行文の推敲・改作を重ねた。紀行文の中に組み込んだ発句は新しい俳句になっている。短詩系文学としての俳句として立つ句を作り出した。現代に生きる俳句の古典である。

日本文学研究者ドナルド・キーンは、「おくのほそ道」は芭蕉が旅の間に書き残したノートを五年間にわたって書き直したり磨いたりした作品である。芭蕉は自然の美に非常に敏感であったが、出合った人々も温かく描写した。芭蕉が魅惑的な文章で描いた多くの風景の美は、「おくのほそ道」に今も生きづいている、と述べている（『英文収録　おくのほそ道』講談社学術文庫）。

不玉亭、安種亭、玉志亭の場所は

不玉亭は、中町一丁目（元佐藤歯科医院の所）、安種亭は、本町三丁目（酒田本町郵便局の向かい）、玉志亭は、中町一丁目（北都銀行酒田支店の所）にあった。石碑「芭蕉逗留の地　不玉宅跡」、「奥の細道　安種亭令道（寺島彦助）宅跡」、「奥の細道　玉志近江屋三郎兵衛宅跡」の標柱が設置されている。

玉志亭跡

琢成学校と河鍋暁斎・高山樗牛
―明治十四年明治天皇琢成学校臨御余聞―

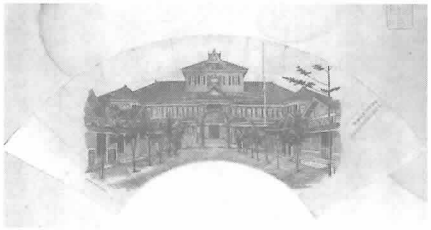
酒田市立光丘文庫古典籍調査員　柏倉 由紀子

酒田の公立学校の始まりは明治二年の学而館ですが、廃校、新設を繰り返し明治十二年（一八七九）十一月八日琢成学校が開校しました。現在の酒田市立琢成小学校の前身です。琢成の校名は太政大臣三条実美が、礼記の「玉不琢不成器。人不学不成行」から命名しました。校舎は、本町通り突き当り（現消防署みなと分署）にあり、中学校も併設した洋風三階建で楼上に大時計がある威風堂々とした校舎でした。明治十六年（一八八三）三月の火災で焼失、再建しますが、同二十年再び火災で全焼、現総合文化センターの地に移転再建しました。度重なる災害で開校時の資料は残っていませんが、光丘文庫では「扇面銅板画旧酒田中学校兼琢成学校」〈写真Ⅶ-8〉を所蔵しています。

昨年、（公財）河鍋暁斎記念美術館元学芸員の方から、団扇絵校合摺「琢成学校」が同美術館に所蔵されているとの情報を頂きました。

河鍋暁斎（一八三一―一八八九）は、幕末から明治にかけて活躍した狩野派絵師で、肉筆画から浮世絵版画まで数多くの作品を残し、奇想の天才絵師とも言われています。

暁斎は実際に琢成学校を見たのではなく、天童出身の写真師・菊地新学が山形県令三島通庸の命を受けて撮影し明治天皇御巡幸の際天覧に供した写真をもとに描いたものと考えられています。暁斎は、天皇御巡幸と何らかの関わりがあったのか、なぜ琢成学校を描いたのか、詳細な経緯については調査が待たれるところです。



「酒田中学校兼琢成学校扇面銅版画」
〈写真Ⅶ－8〉

明治天皇御巡幸の折、在学していた高山樗牛が生徒を代表して奉迎文を読んだという話を聞いたことがある方は多くおられると思います。ところが、元学芸員の方が資料を調べていくうち本当に読んだのか？と疑念が生じ、調査をしました。

光丘文庫には「明治天皇御巡幸祝文」〈掛軸巻物119〉という高山林次郎（樗牛）の「奉祝巡幸」草稿があります。和紙に墨で丁寧に書かれていて、この草稿を奉呈したと思われます。

『山形県行幸記』〈K288メ〉には成富一郎教諭が祝文を朗読し、中学生松田宇之吉と小学生風間彦五郎のご進講があったとあり、高山の名はありません。次の恩賜の頁にも、教員、松田、風間の金額はあるものの高山はありません。が、最後の方に進献詞章がまとめて掲載されており、成富一郎の次に高山林次郎の「奉祝巡幸」が載っています。

『五十嵐正之日記』〈阿部3-59〉（五十嵐は当時飽海郡書記・学務係）には、「教員曽一郎祝文中学生徒一名小学生徒一名講義有之」とあり、高山の名はありません。

高山樗牛の「奉祝巡幸」草稿

『明治天皇庄内地方御巡幸記』〈K288メ、阿部3-38、酒資24-1〉の三冊は写本で原本は同じものと思われますが、これには成富一郎教諭が「賀表」を奉読した後「小学上等三級高山林次郎祝文を奉呈す」とあり、その後松田と風間のご進講と書かれています。樗牛の〝奉呈＝さしあげること〟はあったと考えられます。

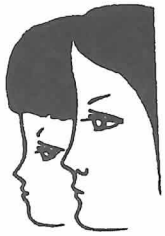
『琢成五十年』（大正十三年刊）〈K372タ〉の佐藤良次（古夢）「回顧五十年」の中で「樗牛高山林次郎氏賀表を捧読せらるると聞き憧憬の念欣羨の情実に禁ずる能はざりしを記憶す」とあります。良次氏は当時既に退学していたが友人達とは親密にしていたとあり、奉読の現場は見ていないが話を聞いたということのようです。良次氏の記憶違いか、そもそも話を聞いたときに樗牛が読んだことになっていたのかもしれません。

佐藤三郎著『酒田の今昔』〈アタK-2・3〉にも「当時小学生だった高山樗牛が奉迎文を朗読した」とあり、三郎氏の他の著作本も同様です。良次氏の息子である三郎氏が、身近で見聞きした樗牛の話をそのまま書いたのではないかと思われます。

昭和六十三年発行の『酒田市史年表』には樗牛が「明治天皇行幸の際、琢成学校で小学生を代表して奉迎文を読んだといわれ、その草案が光丘文庫にあるが、須田古龍は読まなかったという。」とあります。樗牛が読んだという話が事実のようになってしまったので、訂正の意味で須田古龍の話を挿入したのではないでしょうか。

文豪・高山樗牛が天皇の御前で奉迎文を読んだ、という話の方が聞こえがいいのですが、奉呈したというのが事実のようです。

※〈〉は光丘文庫所蔵の請求番号



読書感想文

メアリーの強い心

酒田市立亀ヶ崎小学校
二年　阿部　真央

メアリーがいなかったら、わたしの大すきなズボンが、今もはけなかったと思います。むかしは、男の人はズボン、女の人はドレスときめられていました。でも、メアリーはゆう気を出してズボンをはいて町へ出ていきました。メアリーがズボンをはいたことをみんなではんたいしました。町のみんなはうるさくて、いじわるだと思います。お父さんに、「人間って、当たり前だと思っていたことが、かわってしまうのがこわいんだよ。」と、なぐさめてもらったメアリーは、少し元気が出てうれしかったと思います。つぎの日も、かくごをきめて、ズボンをはいて学校に行ったメアリーは、心が強いなと思います。

もしも、わたしがメアリーだったら、みんながしないことをたった一人でできなかったと思います。それは、とてもどきどきして、ゆう気のいることだからです。でも、メアリーの心の強さを見て、わたしもまねできるかな、まねしてみたいなと思いました。わたしだったら、みんなにズボンのよさを教えて、広めていくほうほうで、なかまをふやしていきたいと思います。

はじめは、メアリーのアイデアを「いいね」と、言ってくれる人なんてだれもいませんでした。でも、あるとき教しつに入ると、ズボンをはいた女の子が、たくさんいたのです。きっと、びっくりとうれしいの二つの気もちだったと思います。女の子たちは、今まで知らなかった、ズボンがうごきやすいということをメアリーに教わったんだとかんじました。

もし、ズボンをはく女の子がいなかったら、ドレスでは走れないので、足がはやい女の子がいなかったと思います。オリンピックは、男の子だけが出場していたかもしれません。女の子は、りょうりを作るしごとしかなかったかもしれません。わたしも、外あそびをえらぶことができなかったかもしれません。当たり前のことをかえてくれたメアリーに「ありがとう」とつたえたいです。

《「せかいでさいしょにズボンをはいた女の子」
キース・ネグレー　作
石井　睦美　訳
発行所　光村教育図書株式会社》

第六十七回青少年読書感想文コンクール山形県審査会小学校低学年　自由読書の部　最優秀

「光丘」第一号

図書館報「光丘」は、光丘文庫広報誌「光丘」となります

来年四月から市立図書館の運営体制が変わることを機に、「光丘」の図書館報としての発行は今回が最終となります。

図書館報「光丘」は昭和四十年六月に創刊され、そのルーツは昭和十三年四月、光丘文庫に付設された酒田文化協会の会報「文庫」にさかのぼるものであり、「文庫」は昭和十六年十二月に第四十一号をもって廃刊となりましたが、二十年以上のブランクを経て、その精神を受け継いで発刊したのが図書館報「光丘」であり、佐藤三郎氏や佐藤公太郎氏といった文化人の協力を得ながら、長年にわたって酒田の地域文化を発信してきました。

中央図書館の駅前移転をきっかけに、光丘文庫は、地域史研究拠点としての機能強化を目的に令和六年度から資料館との統合が予定されており、地域文化を紹介・発信する施設としての機能を充実させていく予定です。

このような事情を踏まえ、「光丘」は来年度から光丘文庫の広報誌として発行しますので、引き続きご愛読くださるようお願いいたします。

「文庫」第一号

【執筆者紹介】▽▽▽▽

清野　誠
（公益財団法人本間美術館事務長）

杉原　丈夫
（庄内酒田古文書館館長）

岩浪　勝彦
（酒田市立図書館館長）

相蘇清太郎
（日本現代詩人会会員）

柏倉由紀子
（酒田市立光丘文庫古典籍調査員）

阿部　真央
（亀ヶ崎小学校二年）

デザイン　佐藤十弥

発行　酒田市立中央図書館　酒田市中央西町二番五九号　電話(24)二九九六番
酒田市立光丘文庫　酒田市中町一丁目四番一〇号　電話(22)〇五五一番　印刷　明徴出版(有)